



Title	発話解釈における終助詞ゼの機能
Author(s)	ヴルボウスキー, マテイ
Citation	日本語・日本文化研究. 2021, 31, p. 146-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

発話解釈における終助詞ゼの機能

ヴルボウスキー マティ

0. はじめに

本稿では、(1) のような用例に現れる終助詞ゼの意味の解明を目標とする。

- (1) パーティーに行くぜ。(※1)

終助詞の意味、または総じて言えば機能に関する研究が多く蓄積されている。(1) の発話に付加された終助詞ゼは、次のような機能と結びつけられている。

- (2) a. 話し手は動作主体の人称の解釈可能性に制約を課する
b. 話し手は聞き手に対して情報の伝達をしている
c. 話し手は聞き手に対して決意を表明している
d. 話し手は、青年～中年の男性であり、かっこいい雰囲気を持っている／またはかっこつけている；物語において主に脇役を演じている

この順番に、人称制限 (仁田、1991)、伝達か確認なのか (日本語記述文法研究会、2003)、発話としての解釈における機能 (内田、2001 等)、役割語としての意味 (金水、2003) である。それぞれが異なるレベルの異なる機能ではあるが、全てが終助詞ゼと関わっている。その中で本稿は (2c) の機能に絞り、(3) に対する答えを探す。

- (3) 発話解釈における終助詞ゼの機能とは何か

1. 先行研究とその問題点

終助詞ゼの機能は、伝統的に「弱い主張」や「軽い念押し」とされてきた。

- (4) 話の内容について軽く念を押し、注意を喚起する。(国立国語研究所、1951 : 62)

(4) に代表される伝統的な見解は、近年の研究にも影響を与えている。ゼの談話機能の分析を行ったスワン (2004) は、終助詞ゾと終助詞ゼを取り上げ、幾つかの談話機能を記述しているが、(5) は終助詞ゼの談話機能とされているもののうちの 1 つである。

- (5) 「終助詞ぜの談話機能について言えば、」話し手と聞き手のお互いの気持ちを分かち合うこと（例えば、応援の時など）を目的とし、提示された命題内容に力強さを添える（スワン、2004：55）

続いて、終助詞の語用論的な分析を提示している中崎（2008）は、「～ようぜ」のような勧誘文に関して次のように述べている。

- (6) 「終助詞ぜの機能について言えば、」誘いかけといった発話の力（illocutionary force）を話し手が聞き手に強調する（中崎、2008：145）

それぞれの研究の用いる表現は異なっているが、(5)の「命題内容に力強さを添える」という働き、そして(6)の「発話の力を…強調する」という働きを、(4)の「話の内容について軽く念を押す」という概念の延長線上として捉えても良いであろう。

1.1 単純対応関係

次に、語用論的な枠組み内において終助詞の機能を観察してきた内田（2001）と中崎（2008）を詳しく紹介する。内田（2001）は終助詞が発話行為（※2）に対応する（以後、「単純対応関係」と呼ぶ）と提案している。終助詞と発話行為（または遂行動詞）との関係性を指摘する研究は少なくとも上野（1972）に遡るが、現在に至ってもある程度影響力を持ち、終助詞の意味的研究以外の分野（例えばカートグラフィー研究の遠藤（2014））にも及んでいる。

発話行為とは、もとより Austin（1962）の概念であるが、未だに広く用いられている。何かを発話することも行為であると唱えた Austin（1962）は、次のような分類をしている。

- (7) a. 発語行為
b. 発語内行為
c. 発語媒介行為

この分類において、「発語行為」とは意味のこもった発話をする行為であり、「発語内行為」とは意図のこもった発話を遂行することであり、そして「発語媒介行為」とは、当該発話による、聞き手に及ぼされる効果のことである。一般的に「発話行為」は、「発語内行為」を指す用語であり、本稿においても「発話行為」と述べる場合、「発語内行為」を指し示す。

内田（2001）では、とりわけ終助詞ぜについて分析がなされているわけではないが、内田

（2001）が唱える、各終助詞が発話行為に対応しているという仮説に則れば、終助詞ゼロも何らかの発話行為との対応関係があるということとなる。以下が内田（2001）の提案する対応関係である。

- （8） a. こっちへ来るよ。（告知）
b. こっちへ来るぞ。（警告）
c. こっちへ来るね。（確認）
d. こっちへ来るさ。（予想）（内田、2001：14、15）（※3）

本稿は、単純対応関係が前提とする「終助詞は発話行為に何らかの形で貢献する」ことには議論を唱えないが、単純対応関係そのものが幾つかの解決すべき課題を抱えていると指摘したい。

単純対応関係は、1つの終助詞が1つの発話行為に対応すると仮定するものであるが、以下の作例からわかるように、終助詞ゼロに関して言語事実はこの仮定と一致しない。

- （9） a. おい、正解はそっちじゃなくて、こっちだぜ。（主張）
b. よっしゃー！ 今度こそ勝ってみせるぜ！（決意表明）
c. （焼きそばパンを投げて）これあげる。うまいぜ。（推奨）

（9abc）からわかるように、1つの終助詞が複数の発話行為に対応している。この言語事実を踏まえると、単純対応関係は論理的に2つのパターンが考えられる。

- （10） 対応関係1：{主張}=ゼ₁、{決意表明}=ゼ₂、{推奨}=ゼ₃、...ゼ_s。
（11） 対応関係2：{主張、決意表明、推奨、...s}=ゼ

それはつまり、（10）のように、s（sは終助詞ゼが共起できる発話行為の数を表す変数）までのゼ（ゼ₁～ゼ_s）がそれぞれの発話行為に対応するパターンと、（11）のように、1つの終助詞ゼがsまでの発話行為に対応するパターンである。そして両方のパターンには解決すべき課題がある。前者の場合は、sまでの終助詞ゼが存在しうするため、ゼの使用及び理解において支障があることが予想される。後者の場合は、終助詞ゼの意味の中において、どの場合にどのような発話行為が活性化されるか、いわば発話行為の成立条件が問題になってくる。この2つの課題に対して答えを出している研究はまだない。

本稿は、単純対応関係そのものを支持はしないが、終助詞が発話行為に何らかの形で貢献すると仮定する。そしてそれが終助詞の意味と深く関わると仮定すれば、その「何らかの形」を明らかにしなければならない。よって、本稿の課題である「発話解釈において終助詞ゼの

機能とは何か」に答えるため、まず (12) に答えなければならない。

(12) 終助詞ゼはいかにして発話行為に貢献しているか

1.2 終助詞ゼとコンテキスト的想定

中崎 (2008) は、終助詞 (ゼに限らず) の機能を、基本的な機能、(あるとすれば) 独話場面における機能と、対話場面における機能に分類し、それぞれの成立条件を記述する、極めて綿密周到な分析を提示している。その中で、特に次の (13) のような用例の (14) の分析が本稿の議論に関わっているため、注目したい。

- (13) ステン「……いや、お前ってカワイイかおしてるよな」
エル「ば、ばか！ 何、言ってんだよーお、お、おれは男だぜー!!」
ステン「…ああ、おいしいよなこれで、女だったら…………キスしたくなるな と、
思ってね」(中崎、2008 : 141)
- (14) a. 話し手は、男である (認識した事態)
b. 男性は、男性 [原文のママ] に対して好意を抱くものである (推論の前提)
c. 男である話し手に好意を抱くべきではない。(推論の帰結) (中崎、2008 : 142)

(13) では、男性である話し手が、同じく男性である聞き手にキスされようとしているところ、話し手は「おれは男だぜー!!」と述べている。この発話の本当の意味 (話し手が聞き手に伝えようとしている意味) は (14abc) が示している通りである。「男性は、男性ではなく、女性に対して好意を抱くべきである」ため、「おれは男だぜー!!」との発話が当該のコンテキストにおいては、《キスなんかやめて》を伝達している。中崎 (2008 : 142、143) によると、本当の意味を導出させるために、(14abc) の処理をすることが、終助詞ゼの機能である。

- (15) [終助詞ゼの機能について言えば、] 当該の事態が、その事態を前提として、文脈から関連するなんらかの想定が導出可能な事態であることを明示する

要は、終助詞ゼを用いることで、話し手は聞き手に対して、当該発話を手がかりにして文脈から何らかの想定を導くことができる、ということを明示する働きがある。この意味の想定 (「コンテキスト的想定」ともいう) は、関連性理論 (Sperber and Wilson, 1995) の用語であり、真偽判断が可能な知識を指しているものである。

ただし、(15) のように規定されている機能は、ゼに限定されているわけではない。例え

ば、類似した働きは、終助詞ヨにあるとする研究（Matsui, 2000）と、終助詞ゾにも観察されとする研究（ヴルボウスキー、2019）があり、（16abc）のように、（13）のゼを終助詞ヨに、または終助詞ゾに置き換えても、発話が成立する。このように置き換え可能であることは、中崎（2008）も認めている。

- (16) a. ば、ばか！ 何、言ってんだよーお、お、おれは男だぜー!!
b. ば、ばか！ 何、言ってんだよーお、お、おれは男だよー!!
c. ば、ばか！ 何、言ってんだよーお、お、おれは男だぞー!!

しかし、（17abc）のような例の存在に注目したい。日本語記述文法研究会（2003）は終助詞ゾに関して、行為の実行を求めやすいとしている。そこで、状況設定を、話し手が聞き手に対して《ビールを持ってこい》のつもりで発話したとすると、ゼとヨにおいて容認性にばらつきが生じる。

- (17) a. おーい、ビールがないぞ。（日本語記述文法研究会、2003：246）
b. ?おーい、ビールがないぜ。
c. ??おーい、ビールがないよ。

すなわち、終助詞ぜ、終助詞ヨと終助詞ゾには（15）のような機能があるとしても、それぞれの「導出可能な想定」は異なるのである。そこで、本稿の主張は2つである。1つ目は、終助詞ぜの意味を特定するには、（12）の「終助詞ぜはいかにして発話行為に貢献しているか」に答えなければならないことである。そして2つ目は、その答えの糸口が（18）の答えにあると仮定する。

- (18) 終助詞ぜならではの導出可能な想定とは何か

2. 本稿の前提

本節では、本稿の前提を提示する。1つ目は以下の通りである。

- (19) 終助詞の意味研究においては、統語的な現象と意味的な現象を区別しなければならない

その根拠は次の通りである。終助詞の意味研究では、終助詞の置き換えが有力な検証法とさ

れている。例えば、終助詞ぜは勧誘文と共起することが可能でありながら、終助詞ゾはそれが不可能であるということは周知の事実である。

(20) さあ、行こう {ぜ/*ぞ}。

(20) のような現象に基づき、「終助詞ぜは勧誘文と共起可能という言語事実は、終助詞ぜの意味が然々であると示される」、もしくは、「終助詞ゾは勧誘文と共起不可能という言語事実は、終助詞ゾの意味が然々であると示される」と分析されがちである。要するに、(20) は、意味的な問題であると予め前提とされ、分析が行われる。しかし、意味的な問題として扱うべきという前提は果たして妥当であろうか。ヴルボウスキー (2019) では、このような現象はむしろ統語論的な問題として扱うべきであると議論している。

このような問題を避けるため、本稿は、終助詞の置き換えテストを行う際は、平叙文のような文タイプに限る。

(21) このラーメン、先日食べた {ぞ／わ／ぜ／よ／ね}。

(21) からわかるように、平叙文は、幅広い終助詞が共起可能な形式である。よって、あらゆる状況が同様である場合でも、用例 y に終助詞 x を挿入すれば容認度が下がる、といった言語事実があるとすれば、それこそが意味的な考察に適切な現象と確信できよう。

本稿の2つ目の前提は次の通りである。

(22) コミュニケーションは、高度な読心能力に基づき行われている (Sperber and Wilson, 1995)

はじめにコミュニケーションの流れを整理しておく。話し手は、聞き手に何らかの情報を伝えたい場合、その情報を、聞き手が理解可能な手段（言語に限らず）を通じて、聞き手に提示する。他方、聞き手は、話し手に提示された証拠に基づき、持っている知識を活かし、解釈に励む。つまるところ、コミュニケーションは、意図明示（話し手側）と推論（聞き手側）という2つの側面から成立しているのである。そして、このようなコミュニケーション過程の中においては、読心能力が不可欠である。

(23) 今度、山田くんと一緒に例のお店に行ってみない？

(23) は文として成り立っているが、実は幾つかの空白を含んでいる。例えば「山田くん」とは誰を指しているか、「例のお店」とはどこなのか等は、(23) 自体が提供している情報だ

けでは決定不十分である。このような場合、話し手と聞き手が持っている共通知識を参照することによって、このような空白が埋められる。共通知識とは端的に言えば、「聞き手が持っているであろう」と話し手が想定している知識、かつ、「聞き手が話し手も持っているであろうと想定している」と話し手が想定している知識のことである。こうして話し手は、聞き手の理解可能な手段を見込むため、聞き手が持っている知識をある程度想定しなければならないと同時に、話し手が聞き手の心中をある程度読んでいる点、それから「話し手が聞き手の心中をある程度読んでいる」と聞き手も想定している点において、この読心能力は（埋め込み構造をしているという意味で）「高度」である。

3. 終助詞ぜと発話行為

本論に入る前に、(24) の用例を見ながら、用語を整理しておく。

(24) （焼きそばパンを投げて）これあげる。うまいぜ。（(9c)の再掲）

(7abc)に基づくと、(25abcd)の分類が見えてくる。

- (25)
- a. 話し手は聞き手に対して〈焼きそばパンはうまい〉と発話している
 - b. 話し手は聞き手に対して〈焼きそばパンはうまい〉と主張をしている
 - c. 話し手は聞き手_iに対して〈焼きそばパンはうまい〉と主張をすることによって〈x_iが焼きそばパンを食べたらどう?〉と行為の実行を勧めている
 - d. 聞き手が焼きそばパンを食べる行為

(25a)は、発話が文字通り表している内容であり、発話行為である。それに対して(25d)は、聞き手に及ぼされる効果の「焼きそばパンを食べる」行為であり、発話媒介行為である。

(25b)と(25c)は両方とも話し手の意図を伝達している点において発話内行為ではあるが、その中で(25c)は話し手が聞き手に理解してもらいたい内容であり、(25b)はその理解してもらいたい内容にたどり着くための手がかりである。Searle(1985)では、前者のことを一次的な発話内効力と言い表し、後者のことを二次的な発話内効力（以後、一次的な発話内効力を持つ発話を一次的な発話行為と呼び、二次的な発話効力を持つ発話のことを二次的な発話行為と呼ぶ）と言い表している。

本稿は、「終助詞ぜはいかにして発話行為に貢献しているか」及び「終助詞ぜならではの導出可能な想定とは何か」に答えるため、まず中心的に(25c)のような一次的な発話行為を分析対象とする。本論では、まず助言や推奨等の発話行為を遂行する場合の分析を行い、

次に主張等及び決意表明等の発話行為を行う場合を順番に概観する。

3.1 推奨や助言等の発話行為

本小節を「終助詞ゼならではの導出可能な想定とは何か」の問いから始める。答えを見つけるためには、(17abc) の背景で働いている原理を明かさなければならない。換言すれば、(17a) はどのような場合に成立するか、それに対して (17b) をどう調整すれば終助詞ゼでも成立するか、という問題を解決しなければならない。(17c) の終助詞ヨに関しては、紙幅の都合上、議論に加えないことにする。

議論の足がかりとして、(17a) のようなゾで終わる発話の成立条件を概観する。ヴルボウスキー (2019) は (17a) のような発話を、現状改善の行為要求と呼ぶ。行為を要求する発話が成功するためには、当該発話行為が誰か (例えば話し手) にとって望ましい行為であり、かつ、行為要求が向けられた受け手にとって実現可能な行為でなければいけない。(※4)

ヴルボウスキー (2019) は、終助詞ゾが、命令文や依頼文と共に起不可能であるが、ある種の行為要求の力を符号化している意味規定を提案している。そのため、終助詞ゾが発話解釈において常に聞き手に何らかの行為を要求している。(17a) の解釈過程を記述すれば (26) の通りになる。

- (26) 《ビールがないことは、俺にとって望ましくない事態だ。君にはこの事態を修復する責任がある。この場合、君にとって実現可能、かつ、俺にとって望ましい改善方法は、ビールを持ってくることだ。だから、さっさとビールを持ってこい!》

要するに、現状改善の行為要求は、発話が表している内容が話し手にとって望ましくないこと、聞き手にその事態を改善する責任があること、そして最後に話し手にとって望ましく、かつ、聞き手にとって実現可能であることを特徴としている。それに対して終助詞ゼの場合、行為要求はどのように成り立つのであろうか。

- (27) (A 君が B 子を B 子の付き合っている彼女について警告している場面)

A : あいつはやめた方がいい。

B : えっ?

A : 何かたくらんでるぜ、あいつ。 (GTO)

- (28) (授業をボイコットしている生徒を連れ戻そうとしている担任教師)

お前、確か、高校なんて、東大入るまでのただのリハーサルだって言ったな。

俺はいい大学に入って、いい生活するよりいい友達見つける方がよっぽど大事だと思っぜ。 (GTO)

- (29) (寒い中、同じ場所に居座っているBにAが缶のおしるこをあげる)
あ、そうだ、これやるよ。(缶をBに投げる) めっちゃうまいぜ。 (ラッキー)

(27~29)は、終助詞ゼの行為要求の用例である。行為要求は、(27)のように言語化(波線部分で表示)されている場合があれば、(28~29)のように、言語化されていない場合もある。なお、(27~29)を(27'~29')のように置き換えることが可能である。二次的な発話行為であるゼ文は、一次的な発話行為である行為要求の根拠であるため、カラで結びつけることができる。

- (27') 《xは何か企んでいるから、やめた方がいい》
(28') 《高校に通う価値があるから、学校に戻った方がいい》
(29') 《缶のおしるこはめっちゃうまいから、飲んでみるといい》

ここで幾つかの事実が浮き彫りになったことに注目されたい。まず、主な傾向として、終助詞ゼが付加された発話は、聞き手にとって望ましい内容を表しているのである。日本語記述文法研究会(2003:248)はこの特徴に関して「聞き手に対する配慮」と言及している。これは、終助詞ゾの傾向である、話し手にとって望ましくないという特徴と大きく異なる。

次に、終助詞ゼの行為要求は傾向として、聞き手に行為実行を「～方がいい」や「～するといい」のように勧める特徴がある。それに対して終助詞ゾの場合は、聞き手に行為実行の責任を前提とし、その責任を追求する特徴が観察される。最後の点は、話し手と聞き手との立場関係が関わっていると考えられる。スワン(2004:51、56)によると、終助詞ゼは仲間認識を前提とし、終助詞ゾは上下関係を前提としている。立場上、より上位な位置を占めている人物は、より下位な位置を占めている人物に対して命令を出しやすい。他方、仲間の関係では、命令より助言や推奨等が適切であろう。終助詞ゾと終助詞ゼは、スワン(2004)が述べているような情報も符号化していると仮定すると、それぞれの終助詞の、発話解釈における働きとの整合性のある説明が可能となる。

最後に、上述の特徴を踏まえると、(17b)の、終助詞ゼでも成立可能な条件が見えてくる。

- (30) (話し手が《一緒に取りに行こう》のつもりで述べている)
おーい、ビールがないぜ。(※5)
(31) 《ビールがないことは、俺にとっても、君にとっても望ましくない事態だ。この場合、俺らにとって実現可能、かつ、俺らにとって望ましい改善方法は、ビールを取りに行くことだ。だから、一緒にビールを取りに行こう》

前述の主な傾向を表 1 にまとめる。傾向というものであるため、「望ましさ」の判断に関しては場面別で差が生じる場合もあるが、話し手（表では S）と聞き手（表では H）の立場関係、そしてとりわけ行為実行の責任の主張及び行為要求の仕方に関して差が生じにくい。

表 1：終助詞ゾと終助詞ゼの使用に伴う主な傾向

	当該発話の内容	要求される行為の内容	S と H の互いの立場関係	行為実行の責任を主張	行為要求の仕方
ゾ	S にとって望ましくない	S にとって望ましい	S は H より上位	する	責任を負わせる
ゼ	H にとって望ましい	H にとって望ましい	S と H が対等	しない	実行を勧める

表 1 が示している特徴はあくまでも傾向であるため、その傾向性にそぐわない例の存在に注目したい。次の (32) と (33) が挙げられる。

(32) おーい、ビールがないぜ。((30) の再掲)

(33) ば、ばか！ 何、言ってたよーお、お、おれは男だぜー!! ((13) の再掲)

(32) の「ビールがない」ことが、当該発話のコンテキストにおいて話し手にとっても聞き手にとっても望ましくない事態であるため、当該発話の内容が聞き手にとって望ましいという傾向にそぐわない。続いて、(33) の要求される《キスするのをやめる》ことは、(男である聞き手にキスされたら困るため) 話し手にとって望ましい行為であるため、表 1 の要求される行為の内容が話し手にとって望ましいという傾向にそぐわない。

3.2 主張等の発話行為

前小節では、話し手が聞き手に対して何らかの行為を要求する発話行為を対象とし、二次的な発話行為を遂行することによって、一次的な発話行為を伝達する、というパターンの分析を行った。結果として、終助詞ゼの意味は、当該発話の発話解釈において「聞き手にとっての望ましさ」「話し手と聞き手は仲間同士」「話し手は聞き手に行為の実行を勧めている」等の傾向が観察できた。本小節と次小節では、この結果を異なる発話行為に対して適用する可能性に関して考察を行う。

本小節は主張を対象とする。主張とは、世界のあり方に関して発話する行為である。

(34) (親友 A と B が気軽に話をしている場面)

A：(前回の話題の続き) 冴島、お前、最低だ。

B: (新しい話題に切り替えて) さっき客来てたぜ。

A: ん? (G T O)

(35) (上司について話をしている A と B)

A: たぶん男いるぜ、あの人。

B: まじ? (ラッキー)

前小節の推奨や助言のような発話行為は、聞き手に行為を要求するためのものと考えれば、主張は聞き手の知識を改善するためのものと捉えても問題なかろう。(34) と (35) では、終助詞ゼが付加された発話は、聞き手にとって念頭に置いていない、新しい情報(以後、このような性質がある場合は「顕在的」、ない場合は「顕在的でない」と呼ぶ)を提示するために用いられているからである。すなわち、話し手は、聞き手の持っている知識に空白があると想定し、その空白を埋めるために主張を遂行する。

前小節の結果を踏まえると、主張の解釈を次のように仮定できる。

(36) 《x という知識は、君にとって顕在的でない知識だ。この場合、君にとって実現可能、かつ、君にとって望ましい改善方法は、x という顕在的でない知識を頭に収めることだ。だから、そうすることを勧める》

前小節で取り上げていた助言や推奨とはレベルが異なるが、このように仮定すると、終助詞ゼと終助詞ゾとの違いがはっきり捉えられる。(34) と (35) に終助詞ゾを挿入してみると(34') と (35') のようになる。比較のために終助詞ヨも加える。

(34') さっき客来てた {ぜ/ぞ} 。

(35') たぶん男いる {ぜ/ぞ} 、あの人。

前小節の行為要求に比べると、主張を遂行する発話に関して終助詞ゼを終助詞ゾに置き換えても、容認性において著しい変化は観察されない。とはいうものの、それぞれのニュアンスが変わることは確かである。それは、伝統的な見解でいう、「強い主張」と「弱い主張」の差である。本稿の議論が正しければ、その差は次のように説明できる。終助詞ゾの場合は、より上位な位置を占めている話し手が、聞き手に対して知識の空白を埋めるように求めているため、「強い主張」となるのに対し、終助詞ゼの場合は、対等な立場の話し手が、聞き手に対して知識の空白を埋めるように勧めているため、「弱い主張」となるのである。

ただし、課題として動機の問題が残っている。すなわち、聞き手の知識を改善する際に話し手がなぜ主張の強さを調整しなければならないかという問題である。それが認知的警戒(Sperber et al., 2010)に関わっている可能性を本稿の「今後の展望」に提示する。

3.3 決意表明等の発話行為

最後に、決意表明等の発話行為を取り上げる。決意表明とは、話し手が自ら何らかの行為の実行を拘束する行為である。

- (37) (フランス留学のための準備を終えた話し手)
パリジェンヌに日本人の心意気を教えてやるぜー！(新参者)
- (38) (聞き手が話し手にクビにされると心配している場面)
お前が辞めたいって言うまでクビにしないぜ。(最後)

まず、終助詞ぜが決意表明に貢献する働きが少なくとも2つあると述べなければならない。1つ目の働きは、本稿の冒頭に述べていた人称制限である。終助詞ぜを付加することで、(37)と(38)の動作主体は、一人称として解釈されやすく(そして二人称として解釈されにくく)なり、結果的に発話全体が決意表明として解釈される。

2つ目の働きは、主張の発話行為と関わっている。(37)のような発話は、話し手の決意表明でありつつ、聞き手の知識改善を目標としている。つまり、主張の発話行為と同様に、話し手は聞き手に知識の空白があり、その空白を(37)が表している内容で埋めるように勧めているという働きである。

それに対して(38)のような発話は、聞き手の知識における空白を埋める操作というよりは、聞き手が持っている誤った知識(「話し手にクビにされる」こと)を削除し、代わりに提示された新しい知識(「話し手にクビにされない」こと)を取り入れる操作である。結果として、クビにされることを恐れている聞き手は、心配する必要がない、という慰めの効果につながるケースである。

- (37') パリジェンヌに日本人の心意気を教えてやる {ぜ／ぞ} —！
- (38') お前が辞めたいって言うまでクビにしない {ぜ／ぞ}。

主張等の発話行為と同様に、決意表明を遂行するための発話に出現する終助詞ぜを終助詞ゾに置き換えても容認性が変わらないが、ニュアンスの違いが観察される。それは決意の強さといってよからう。終助詞ゾの場合、決意が強く、終助詞ぜの場合、ゾより比較的弱い、という差である。この効果も、主張等の発話行為に見られる要因に起因すると考え、「今後の展望」で触れる。

4. 終助詞ぜの意味規定

前節の結果を(39)の規定にまとめる。

- (39) 《xは、聞き手にとって{顕在的／顕在的でない}、かつ、yにとって{望ましい／望ましくない} ことだ。この場合、聞き手にとって実現可能、かつ、yにとって望ましい改善方法は、zという行為を遂行することだ。だから、そうすることを勧める》

xの値はゼ文が表す内容で満たされる。xは主として聞き手にとって顕在的でない場合が多く、顕在的である場合は、推奨や助言等の発話行為を間接的に遂行するための発話に限る。

- (40) (焼きそばパンを投げて) これあげる。うまいぜ。((9c) の再掲)
(41) (《一緒に捕まえよう》のつもりで) おい、あいつ逃げるぜ!

(40) は《食べたら?》、(41) は《一緒に捕まえよう》という一次的な発話行為を遂行するための発話であるため、ゼ文が表す内容が聞き手にとって顕在的であっても成立する。それに対してそうでないもの(知識の改善を目標とする発話)は、聞き手にとって顕在的であってはならない。顕在的な解釈の場合、認知効果が期待されないためであると考えられる。

- (42) (相互顕在的な解釈の場合) *たぶん男いるぜ、あの人。((35) の再掲)

次に、yの値が問題になってくるが、表1及びそれに関する議論からわかるように、主な傾向として「聞き手」が選択されるが、「話し手と聞き手」または「話し手」という場合も存在する。よって、yの値が頻度の高い順に{聞き手／話し手と聞き手／話し手}の選択肢から選ばれると言えよう。

最後に、zの値は、当該発話のコンテキストにおいてyにとって望ましく、かつ、聞き手にとって実現可能という条件下で話し手と聞き手両者の共通知識から喚起される。

5. 結び

本稿では、発話解釈において終助詞ゼの機能とは何かという問いに対する答えを目標とした。答えるために、話し手が聞き手に対して何らかの行為を求めるような発話行為を分析し、終助詞ゼならではの導出可能な想定を特定した。結果として、(43)のような意味規定及び(44~45)のような制約が見えてくる。

- (43) 《xは、聞き手にとって{顕在的／顕在的でない}、かつ、yにとって{望ましい／望ましくない} ことだ。この場合、聞き手にとって実現可能、かつ、yにとって望ましい改善方法は、zという行為を遂行することだ。だから、そうすることを勧める》((40) の再掲)
(44) 認知効果が期待されず、かつ、奨励や助言等を遂行しない解釈が除外される

- (45) y の値は頻度の高い順に主として {聞き手／話し手と聞き手／話し手} から選択される (※6)

終助詞 $ぜ$ は、 $x/y/z$ 及び { } の中身のような、コンテキストによって埋められる値を含んだ、一定の解釈過程に導くような手続きを符号化していると仮定すれば、発話行為にいかにして貢献しているかが明確になる。聞き手は、推奨や助言の場合、主として聞き手にとって望ましい行為に繋がるような想定、主張等の場合、聞き手にとって顕在的でない知識の操作（聞き手の知識における空白を埋めるか、または聞き手の誤った知識を破棄し、提示された知識を取り入れるような操作等）に繋がるような想定に導かれる。決意表明の場合も同様である。最後に、聞き手は発話された内容とそれに導かれた想定に基づき推論をし、結論として導き出された行為 z の実行を勧められる。

6. 今後の展望

最後に、本稿で問題となった終助詞の「主張の強さ」、または「決意の強さ」に触れたい。Sperber et al. (2010) では、認識的警戒 (epistemic vigilance) という概念が紹介されている。認識的警戒とは、虚偽や語弊から守るための、人間が備えている認知的措置である。そのおかげで、人間は、入ってくる情報を無意識的に、かつ常にモニターしているため、必要に応じて警戒レベルを調整し、信用できないと判断された場合、遮断することもある。

そこで、終助詞 $ぜ$ や終助詞 $ゾ$ の、認識的警戒との関係性が証明できれば、上記の議論の幾つかの問題が明らかになってくる。「強い主張」や「強い決意」とされてきた終助詞 $ゾ$ は、話し手の上位な位置、それか聞き手に行為の実行を促すことをもって聞き手の認識的警戒を突破する形式と捉えられる。他方、より「弱い主張」やより「弱い決意」の終助詞 $ぜ$ は、話し手と聞き手の仲間関係、及び聞き手に行為の実行を勧める効果をもって認識的警戒を低める形式であると考えられる。このように仮定すると、新しい分析の可能性に繋がると期待される。終助詞と認識的警戒との繋ぎの解明は別稿に委ねたい。

註

- 1: 用例出典は、原則として用例の右側に () の中に記入とするか、または本文で明示する。それ以外の場合、筆者作例である。
- 2: 「それぞれの助詞がそれぞれの高次表意に対応している」 (内田、2001: 14)
- 3: その特徴として対応する遂行動詞を用いて発話が表している内容全体を埋め込むことができる。例えば終助詞 $ヨ$ の場合は、「話し手が聞き手に対して〈 x がこっちへ来る〉と告知している」のように言い換えることが可能である。
- 4: 例えば「さっきのことを忘れてください」は依頼のマーカーを含めているが、話し手の「願望」である。何かを忘れることは、意志制御不可能な行為である以上、実現不可能なためである。

5:このような特殊なコンテキストでなければ、話し手の期待外れの気持ち、意外性を帯びるような解釈がより一般的である。その効果は、従来の知識(「ビールがある」こと)を削除し、新しい知識(「ビールがない」こと)を取り入れる操作に繋がっていると予想される。

6: (44)の制約は、関連性原理とゼとの相互作用から出てくるものと予想される。

参考文献

- 上野多鶴子(1972)「終助詞とその周辺」『日本語教育』17、62-77.
- 内田聖二(2001)「高次表意からみた日英比較への一視点」『人間文化 研究科年報』17、7-18. 奈良女子大学大学院人間文化研究科
- ヴルボウスキー・マティ(2019)「終助詞ゾの語用論的考察」(未公開修士論文、大阪大学)
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』63-70. 秀英出版
- スワン彰子(2004)「「ぞ」と「ぜ」の談話機能」『講座日本語教育』40、27-58.
- 中崎崇(2008)「現代日本語終助詞の研究」(未公開博士論文、大阪大学)
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会(2003)「終助詞の機能」『新日本語文法選書4 モダリティ』261-288. くろしお出版
- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words: Second Edition*. Cambridge: Harvard University Press.
- Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Matsui, T. (2000) Linguistic encoding of the guarantee of relevance: Japanese sentence-final particle YO. In Andersen, G., Fretheim, T. (Ed.) *Pragmatic markers and propositional attitude*, 145-171. Amsterdam: John Benjamins.
- Searle, J. (1985) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D., Clément, F., Heintz, C., Mascaro, O., Mercier, H., Origgi, G. and Wilson, D. (2010) Epistemic Vigilance. In *Mind & Language*, 25(4), 359-393. Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and Cognition* (2nd edition). Hoboken: Wiley-Blackwell.

用例出典

- 「GTO」: フジテレビ系ドラマ『GTO』1998年7月～1998年9月放送
- 「最後」: フジテレビ系ドラマ『最後から二番目の恋』2012年1月～2012年3月放送
- 「ラッキー」: フジテレビ系ドラマ『ラッキーセブン』2012年1月～2012年3月放送
- 「新参者」: TBS系ドラマ『新参者』2010年4月～2010年6月放送